

直前難関国公立大国語

直前難関大国語 T

【1 回目】



【問題】

【一】 出典：鷲田清一『現象学の視線』／オリジナル問題

文章略解

日常とは、我々が世界を解釈することで生まれた多様な〈物語〉たちが、矛盾をはらみつつも一貫性を持ち合わせた状態でシステム化されたものであり、多元的であると言える。しかも常に多中心的に変換が起きている。

〈わたし〉とはこのような日常の〈物語〉を通して語り出されるものであるため、日常の内部に巻き込まれている。それなのに外部から対象化しようしたり、一元化して批判をしようしたりしても、そうしようとする〈わたし〉や批判をも含めて新たな日常へ変化するだけである。したがって、日常批判は日常の内部から行わなければならない。

解答

問1 人間の日常生活とそれを取り巻く諸々の事象が相互に関連しあって創るネットワークの総体。〔42字・解答例〕

問2 人間の営みの要素の相互関係が、前者では一義的に完結した統一的体系をなしている状態にあるのに対して、後者では矛盾をはらんだまま集まり可変性を持つ状態にある。〔77字・解答例〕

問3 自己認識というものは、各自をとりまく日常の具体的な事象との関係性の中で生じるものであり、そうした日常の変転によって絶えず捉え返されるものであるということ。〔77字・解答例〕

問4 自己の意識の深層にあって自己の反省を促す存在ではあるものの、自己認識に直接関わるものではないということ。

〔52字・解答例〕

問5 日常の本質を具体的に見据えないまま性急な批判をしても、その批判はやがて批判としての効力を失い、ありふれた日常的なものと化してしまうということ。〔71字・解答例〕

解説

問1 設問のポイントは、「〈物語〉」というカッコつきの語に込められた意味を説明していくことにある。

このような、「筆者独自の用語」の説明にあたっては、まずは問題文の中でその表現が用いられているところを探していけばいい（同じ表現は同じ意味で用いられているはずだ）。この文章では「日常は〈物語〉に取りかこまれながら……」（17～18行目）、「わたし」もまた日常の〈物語〉を通して語りだされる」（21～22行目）あたりが有効な手がかりになる。ここから推せば、この「物語」とは、人間の日常生活を取り巻く個々の構成要素であるということがわかるだろう。まずはこの点の指摘がほしい。

加えて、傍線部直後の「まとまりを欠いたままでは十分に機能しないが……」以下の記述にも注目したい。ここの記述から推せば、これらの「〈物語〉」は相互にある程度の関連性を持ち、まとまりとして機能していることがわかる。この旨の指摘もほしい。以上二点の内容が含まれた解答ならば基本的に正解である。ちなみにこれは、11～12行目の「さまざまな構成契機がある程度、つまり相対的に一貫して編成されたゆるいシステム」とされているところに相当している。

問2 設問のポイントは、ここに示された「緊密な結合態」と「可塑的な凝集態」という二つの状態の相違を説明することにある。こうした「相違」の説明にあたっては、「双方の分量は等しく、内容は対比的に」ということを心がけてほしい。

内容的なポイントは、前問を解く過程で「〈物語〉」の性質をきちんと踏まえていれば、比較的容易につかめよう。「可塑的な凝集態」とは、「〈物語〉」＝「日常生活の構成契機」たちのまとまりの態様が、ある程度の変性を有していることを意味している（「可塑」の「塑」とは「けずること」。つまり「可塑性」とは、外形がある程度変わりうることを意味している）。ここを裏返せば、「緊密な結合態」の説明もできるだろう。要するに、「こうなればこう」というふう複数の要素の関係（因果関係・並列の関係など）がきちんと決まっている状態がそれに相当する。

以上二つの対比がクリアーに打ち出された解答ならばOKだ。

問3 設問のポイントは、傍線部の「根を張り」「紡ぎだされ」という比喩的な表現を分かりやすく言い換えることにある。その前提

として、まずは傍線部にかかる主語である「〈わたし〉」という語の意味を捉えておこう。これについても、問1と同様に、問題文中でこの「〈わたし〉」という表現が用いられているところを探していけばいい。「日常の変転に反省的にかかわっていかうとする〈わたし〉」(20行目)、「〈わたし〉は……全面的に対象化しようと試みる」(23～24行目)、「反省する〈わたし〉という存在の辺縁」(29行目)といった一連の記述から推せば、ここで言う「〈わたし〉」とは、自己自身に関する省察を意味しているということがわかるだろう。

では、その「〈わたし〉」が、①「生成しつづける日常のなかに根を張り、そのつど、そのなかから紡ぎだされ」、②「その(『日常の』)なかで再認識される」とはどういうことなのだろうか。

①については、問1・問2で検討してきたことから推せる。「日常」は絶えず生成されていくものであり、その「日常」との具体的な関係性の中から「〈わたし〉」が自己に対する省察が生まれてくるという旨の指摘があればいい。考えてみればすぐにわかることだろうが、自己というものの認識とは、必ずや他との関係性の中で生まれてくるものであるということだ。

②については、傍線部直前の「反省的にかかわっていかうとする」という記述が手がかりになる。自己に対する批判的・反省的な認識が、その時その時で直されていくという旨の指摘があればいいだろう。

以上①・②の踏まえられた解答ならばOKだ。

問4 これも、問1同様「内なる外部」という圏点^{けい}つきの表現の意味を、平たく言い換えることがポイントである。①「内なる」、②「外

部」の二つに分けて考えていけば、説明のポイントも明確になるだろう。

内容的な手がかりは傍線部を含む段落の記述にある。ここで「反省する〈わたし〉という存在の辺縁で、〈わたし〉の内部へと取りこめないような非人称の思考がすでに働きだしているのだとすれば」(29～30行目)と述べられているところから推せば、①の「内なる」とは、自己の「反省」に関わるものであるという意味になる(その意味でその人の内面にコミットするものである)。また②の「外部」ということについても、この「〈わたし〉の内部へと取りこめない」の部分をつまみ、自己の内面それ自体には無関係だという旨の指摘がなされていけばいいだろう。

問5 これも問3同様、「呑みこまれ、報復される」という比喩的な表現を置き換えることがポイント。傍線部の主語は「それ」(45行

目)＝「一義的な批判規準でもって日常の総体を……全体的批判のまなざし」(43～44行目)である。これは「日常」というものの外側から、一義的に「日常」というものを切つて捨ててしまうような批判の態度を意味している。まずはここをきちんと押さえることだ。筆者はこうした「日常」批判ではなく、「日常の内部から紡ぎだされねばならない」(48行目)と主張しているのである。

では、こうした外部からの一義的な「日常」批判がいかなる意味で①「日常そのものによって呑みこまれ」、②「報復される」ということになるのか。①については傍線部の前の文で「……日常が日常そのものを超えていく運動をかえって封じこめてしまふ」の部分手がかりになろう。要するに陳腐な「日常」批判は日常(＝ありふれたものの繰り返し)の枠の中に取りこまれてしまい、「日常」の向上に寄与しないということだ。このことは、傍線部直前の「批判そのものを侵蝕してくる日常性」という記述に符合する。

ここまで読めてくれば②のポイントも見えてくるだろう。「報復される」とは、ここでは「批判しようとした相手から逆に手痛い仕返しをされる」ぐらいに解釈できよう。要するに、「日常」批判のつもりでしたことが批判でなくなつて、逆に「日常」を利してしまふということだ。この旨の指摘もほしい。《解答例》ではここを「批判としての効力を失ってしまう」としておいた。

【配点の目安】 60点 問1 10点 問2 13点 問3 12点 問4 10点 問5 15点

問1

〈ア人間の日常生活とそれを取り巻く諸々の事象がイ相互に関連しあつて創るウネットワークの総体。〉…10点

※ア4点、イ3点、ウ3点

*アは、「日常生活を構成する個々の要素(日常を構成するさまざまな事象)」という〈物語〉の性質を説明していれば可

*イは、「相互に関連している」という〈互いの関係性〉を説明していれば可

*ウは、「まとめり(組織・システム)」として機能していること」という〈全体の姿〉を説明していれば可

問2

〈ア人間の営みの要素の相互関係が、イ前者ではウ一義的に完結した統一的体系をなしている状態にあるのに対して、工後者ではオ矛盾をはらんだまま集まり可変性を持つ状態にある。〉…13点

※ア3点、イ1点、ウ4点、エ1点、オ4点

*アは、傍線部が「日常を構成する要素・部分（の相互関係）」について説明したものであることをとらえていけば可

*イは、「前者では」と、「緊密な結合態」について取り上げていけば可

*ウは、「一義的に完結している（一つの価値・原理でまとまっている）」という〈結びつき方〉と「統一的体系（系統的な組織・変的なまとまり）」という〈様相全体の特徴〉を説明していれば可

*エは、「後者では」と、「可塑的な凝集態」について取り上げていけば可

*オは、「矛盾をはらんだまま集まり（多元的な領野が混在した・異質なものを併合している）」という〈結びつき方〉と「可変性を持つ状態にある（確定した様式も持たずに変転していく）」という〈様相全体の特徴〉を説明していれば可

問3

〈ア自己認識というものは、イ各自をとりまく日常の具体的な事象との関係性の中で生じるものであり、ウそうした日常の変転によって工絶えず捉え返されるものであるということ。〉…12点

※ア3点、イ4点、ウ2点、エ3点

*アは、傍線部が「〈わたし〉」という語について述べていることをとらえ、「〈わたし〉」という語を「自己認識（自分についての意識）」という旨説明していれば可

*イは、アが「日常との具体的な関係性の中から生じていく（確認していく）」という〈「日常」と「自己認識」の関係〉を説明していれば可

*ウは、「日常の変転」という〈「日常」が絶えず生成・変化すること〉を説明していれば可

*エは、「絶えず捉え返される」という〈繰り返し（認識し）直されていく〉という〈自己認識のあり方〉を説明していれば可

問4

〈ア自己の意識の深層にあってイ自己の反省を促す存在ではあるものの、ウ自己認識に直接関わるものではないということ〉…10点

※ア2点、イ4点、ウ4点

*アは、「自分の内面であって」と傍線部の「内なる」について説明していれば可

*イは、「自己の反省を促す」という〈「日常」との関わり〉を説明していれば可

*ウは、傍線部前の「〈わたし〉」の内部に取りこめない」の箇所に着目し、「自己の内面そのものとは無関係」と、傍線部の「外部」について説明していれば可

問5

〈ア日常の本質を具体的に見据えないままイ性急な批判をしても、ウその批判はやがて批判としての効力を失い、エありふれた日常的なものとして化してしまうということ〉…15点

※ア3点、イ2点、ウ5点、エ5点

*アは、傍線部の主語として「それ」をとらえ、「日常世界の成り立ちを理解しない（まま）」という〈日常に対する視点〉を説明していれば可。また、「日常の外部から日常を一義的に」という〈日常を批判する視点〉を説明しても可

*イは、傍線部の主語として「それ」をとらえ、「批判は」という旨説明していれば可

*ウは、「報復される」の説明として「批判は批判として成立せず」という旨説明していれば可

*エは、「日常そのものによって呑みこまれ」の説明として、「ありふれた日常の中（日常世界）に取りこまれてしまう」旨説明していれば可

*ウエをまとめて、「日常を一元化し、定型化してとらえることになり、たえず変化する日常ではなくなってしまう」と説明しても可

現代語訳

あの（お方の）お屋敷では、奥方さまがここ数ヶ月のあいだ御病気でいらっしやったのだが、とうとう亡くなっておしまいになったので、その（忌中の）間の（慌ただしさに）お取り紛れのせいか、また（あのお方のおいでのないまま）時が過ぎるのも当然のことだけれど、（あのお方が私に会いに来ると約束して）確かに言っていたのに異なる（結果になってしまふときの私の）辛さは、（あのお方の奥方さまが御存命でいらした）以前にも増しているような気持ちとする（その一方で）は、（奥方さまを亡くされたあのお方は）今頃どれほど悩み悲しんでどうしたらよいのか判らずに思っただろうかと（思われて）、格別に抱いていらした（奥方さまへの）御追慕の名残も、（どれほどの深さかと私は）とても辛く御推測申しあげるのだが、（源氏物語の一節にある歌のような）「あなたの胸にしみ入る）悲しみを理解する気持ち（は誰にも劣りませんもの、私のようなつまらぬ身ではひたすら忍ぶばかりです）」という心の深さを、（あのお方には歌のとおり）到底お伝え申しあげるすべもなく、月日が流れ過ぎていく悶々と晴れない気持ちなのに、たまたま思い出したかのように（あのお方は突然お手紙を下さって私の心を）お引きつけになったことよ。（そのお手紙には）「無常なこの世の悲しさも自分自身で（直接あなたにお会いして）一緒に語らい申しあげたく（存じます）」などと（書いて）あったので、いつもの、すぐに寝つくところに響いてくる鐘の響き（の中）に、（あの方の訪れの気配を今か今かと窺って）人に知られないようにこっそりと（到来を）あてにする（自分の心）も、考えてみると呆れるほど（浅はかなこと）で、世間の人とは違って実（じ）のない（我が）身のこの先行きは、行き着くところはどのようなようになってしまおうとしているのだろうか、心細く思い続けているのに（つけて）も、かつての（身分違いの恋の辛さも知らなかったころの）ままの気持ちであったなら、いつどうなるとも判らぬ頼りない自分自身の（この恋の罪という）過ちも、これほど（酷く）までは思い知ることもなくて（平穏な人生を）過ごせたものを、などと思いつづけていると、今更ながらに（我が）身の（思うにまかせぬ）辛さも持つて行き場のな（い仕方なさに、どうしようもな）く悲しいので、（もしあのお方が訪れても）今夜は素っ気ない態度で押し通してしまおうかしら（、どうしよう）と、思い悩んでいると、いつもの待ち時間が過ぎてしまふ（というのに、あのお方が一向にいらっしやらない）のはどうしたことかと（心配になり）、（すげなくしようかなどと思っではいたものの）やはり（あの方の到来を待ちわびて）目もとじられずに身悶えしながら横になっていると、いつもの（あの方がお供に連れる）小さな男の子だろうか、ひそやかに（戸を）たたく（音）を聞きつけたからには、冷静に思いを宥（なだ）め落ちつかせようとした

気持ちもどこへやら、そっと（部屋から抜け出して、様子を見に庭へ）出たのも、自分のことながら（まるで男を欲しているかのよう
で）すっかり嫌な気持ちになってしまった上に、月もたいそう暗々と照つてい（て周囲も明るかつ）たので、どうにも体裁の悪い気持
ちがして、透垣の折れ残った隙間（の陰）に身を隠してみると、あの（源氏物語の、末摘花のお宅である）常陸の宮のお住まい（で透
垣の陰に身を隠している頭の中將の姿を描いた場面）を思い出さずにはいられなかったが、（そのとき突然）「沈むところを（見せない
十六夜の月のような光の君を）慕って後をつけ歩く（頭の中將という）方の御様子のようなだが（あなただったとは）勝手が違っておい
ですすね」と（おっしゃつて）、（私の傍に）寄ってくるまさにあのお方の御姿は、（女の住む）里を区別しない（で照らす）光（と詠
われた光源氏の君）にも匹敵するに違いない（ほど素敵な）気持ちがする（、その夜の出来事）は、（後々になっても）ことに印象強
く思い出さずにはいられなくて、いくらなんでもやはり（あのお方も私のことを）お思い出しになる機会もあるのだろうかと思いを馳
せて（いい気になって）思い続けていると、（我ながら）恥ずかしくなってしまうことも多いのだ。

《注文の解釈》

*あはれ知る心（じわじわとあなたの胸に迫る）悲しみを判ってさしあげられる（私の）心は誰にも劣りませんが、物の数にも
入らない（ほど取るに足りない私の）身の上では、（そんな私の心をあなたに伝えるわけにもいきませんので、）ひっそりと消え
入り消え入りするようにはしては毎日を過ごしているのです。

*透垣（亡くなった常陸の宮の娘である末摘花の屋敷の）正殿の方に、あの人（「末摘花」の気配が感じられるようなことがあ
るかもしれない、と、（源氏の君は）お思いになって、そっと（その場を）お離れになる。（その屋敷の）透垣がほんの少し折れ
残っている物陰の方にお回り込みになると、（そこに源氏の君のいらっしゃる）以前から立っている男がいたのだった。誰だろ
うか、（とつくに末摘花に）思いを寄せている浮かれ男がいたのだなあ、と、（源氏の君は）お思いになって、物陰に潜んで隠れ
ていらつしゃ（りながら御覧にな）ると、（実はその男は源氏の君の親友、）頭の中將だったのだ。

源氏の君は、（辺りの暗さに、はじめはその男が）何者だともを見分けることがおできにならず、（ただここにいるのが）自分
だと（人に）知られたくはないものだ、と（お考えになって）、忍び足で（その場を）離れようとなさったところ、（その男は気
配を察していたのか、）すいと近づいてきて、「（夜遊びのためにまんまと撒いてしまおうと私を）お見捨てあそばした恨めしさに、

お見送りして参りましたよ、

もろともに……一緒に大内山（にも喩えられる大きな内裏の門）を出はしたのに、（沈みきらないうちに夜が明けてしまうために）沈むところを見せない十六夜の月（のように、どこの女性のところへ立ち寄るのか人に知られないような夜歩きをなさる、輝く魅力を湛えた源氏の君よ）」

と、（その男が声をかけて）嫌みを言うのも、（源氏の君は）憎らしいのだが、「（なあんだ）この人（「頭の中將だったのか）」とお判りになると、（ホッとすると同時に）少しおかしくなった。（いつの間にか跡をつけていたとは、）誰にも思いもつかない芸当だな」と（源氏の君は）頻りに憎らしそうに、

「里わかぬ……（どのような）里でも分け隔てなく照らす月の姿なら（誰もが）見てはいますが、（天空を渡って）行く月の沈む先の山を誰が探し求めたりしましょうか（それと同じように、女性に分け隔てをしない私の姿は誰もが目にしているでしょうが、こっそりと訪ねていこうとしている女性の家にまで、一緒になって跡をつけてくる人がいますかねえ）」

（と源氏の君が頭の中將に返歌すると、）

「このように（あなたの）跡をつけ歩いたとすれば、（あなたは）どうあそばしますでしょうかね」と、（頭の中將は源氏の君に）お尋ね申し上げなさる。

解答

問 1

(1) ㊦

(4) ㊦

問 2

(イ)

問 3

(3) ㊦到底お伝え申し上げるような方法もなく

(8) ㊦どんな女の家も分け隔てしない光源氏にも匹敵するに違いない気持ち

問 4

うとましき・恥づかしき

問5
(エ)

問6 作者(阿仏尼)と頭の中將(の様子を対比して言っている)。

問7 つれなき世のあはれさもみづから聞え合せたく(4～5行目)

問8 (ウ)・(エ)・(カ)・(キ)

解説

問1 基礎問題。活用の仕方の特徴のある動詞、すなわち、各種変格活用動詞、上二段活用動詞、上二段活用動詞の「恨む・老ゆ・悔ゆ・報ゆ」、下二段動詞の「得・心得・寝・寝ぬ・経・植う・飢う・据う」などは、その活用種と共に頭の中に定着させておく必要がある。

問2 選択肢の各文を見比べると、「愛情」で統一されている。これが「御思ひ」の具体的な内容なので、争点は「誰の誰に対する」ものかに絞られる。ここでまず考えるのは「誰の愛情か」という意識の主体である。「思ひ」に尊敬の接頭語「御」があるから、「作者の思ひ」ではありえない。そこで、「作者の愛情」という選択肢を消し、(イ)・(ウ)・(オ)を残す。また傍線部の前後を見ると、これは修飾句の一部である。「とりわきたる御思ひの名残も」が客語(＝直接目的語)となつて、述語「おしはかり聞ゆれど」に係っている。ここに謙譲の補助動詞「聞ゆ」があるから、「誰かの」御愛情の名残(を)も(作者が)推測」していることになる。この述語「おしはかり聞ゆ」には、客語の他に補語として、傍線部直前に「いかに思しまどふらんと」とあるのに注目する。「AだろうとBを推測する」という構造である。すると傍線部は上のAとBと同一人物の心情に関わる表現である。そしてここに現在推量の「らむ」が付いているので、A＝「思い悩んでいる」のは、現在生きている人物であると判る。したがって、選択肢の「北の方の愛情」は間違い。「男の」という(イ)・(オ)に絞られる。ここまでくれば、「誰に」対するかが、決定権を握る。「北の方」か「作者」かである。この「思ひ」が「名残」であるから、「去ってしまった後に止まっている」ものと判る。よって、「男」のもとを(死に

よって) 去った人物「北の方」が対象。正解はイ)。

問3

(3) まずは副詞「なかなか」の処理。この語には《陳述の副詞》の用法があることに注意。「なかなか」は、単独では「中途半端に、なまじつか」などの意味だが、中世以降になると(阿仏尼による日記『うたたね』が鎌倉時代の作品であるのは文学史上知っておいてほしい)打消呼応をした場合、これを強調する働きを持つ(ここでは「なく」と呼応している)。口語の「なかなか巧くいかない」も同じ用法。したがって、「やすやすとは・簡単には・思うようには・とてもじゃないが」などの意味を答えればよい。「聞えん方」は「聞え(聞ゆ)」が「言う」の謙譲語、「方」は多義語だが、ここでは傍線部直前の「あはれ知る心のほど」を申し上げる「方法」の意で解釈するのが妥当。以上をまとめればよい。

(8) 傍線部の「里わかぬ」は連体修飾句。「里／わか／ぬ」と単語に区切れないと、「わか」の意味が取れない。「ぬ」は連体形なので、『打消』の「ず」である。よって、「わか」は未然形。(念のために言えば動詞の活用形のうちア段音で終わるのは、四段・ナ変・ラ変の未然形しかない。)終止形は「わく」になる。何が「わく」かは、修飾関係を逆転すると判るが、「光、里わかず」である。ここから、「沸騰する(沸く)」「吹き出る(湧く)」の意味が消え、「分く(区別する)」の意味が残る。これは客語(＝直接目的語)を必要とするので、「里」が客語になる。したがって「里わかぬ」を逐語訳すると「里を区別しない」となる。このように答えても、一応問題はないが、噛み砕きが甘いので、残りの傍線箇所を踏まえて解釈を進める。ここでの「光」は直接的に「月光」の意味であると同時に、注から「光源氏」を暗示しているものであると判断できる。そうすると、「空から降り注ぐ月光が里を区別しない(ように光源氏も女性の住むところを区別しない)」と説明を補足できる。ここから、「月光が、地上を平等に照らしている」ことを述べていると判る。よって、この「分く」は「差別のないさま」「平等に配分するさま」を述べていると掴めるので、その意味合いを加えたい。あとは「並びぬべき心地」の解釈。「並び(並ぶ)」は文脈から「匹敵する、優劣が付けられない」という意味だと判断する。また、「ぬ／べき(べし)」は完了・強意の助動詞「ぬ」+推量の助動詞「べし」の組み合わせなので、強い推量(確述)の意味として「……に違いない」「きっと……だろう」などと訳出すること。以上を組み合わせれば、解答例のような表現になるだろう。

問4

ここでは、「男の訪れ」に対する「作者の期待する気持ち」を自分自身で思い返すと「あさましく」思われるのだということを

擱んでいる必要がある。これは、傍線部で「頼みをかくる」のが「あさまし」に対する主語になっている点、また、「思へば」という副詞句が付いている点などを押さえれば、一目瞭然だ。その上で、これ以前には「男の訪れ」はないので傍線部以降を確認してゆく。直後の「心細く」「身の憂さ」は、共に「自分の身の上に対する」心情なので除外。「やるかたなく悲しけれ」は、文構造から「身の憂さ」に対する心情なので、これも除外。「われながらうとましき」は、「やをらすべり出でぬる」気持ちで、これは「男の訪れ」に対する喜びなので、よさそうだ。さらに「われながら」もあるので、『うとましき』を第一の解答とする。また、「はしたなき」は、直前に「月もいみじく明ければ」という理由が接続している。「月がひどく明るい」ことから導かれる結果として「男の訪れに対する作者の期待」というのは、おかしいと判るはず。これは「人の目に対する作者の心配」の気持ちと判って、除外される。そうすると、後に残った心情形容語は「恥づかしき」しかないもので、必然的に、これが第二の解答になる。検算として、答に抜いた形容詞の共通性を見る。「あさまし」「うとまし」「恥づかし」は、それぞれ「呆れ果てるほど情けない」「いまいましいほど嫌になる」「顔が赤くなるほど気が引ける」で、自分自身を対象として用いた場合、共に強い自己嫌悪の心情を表すものである。この設問で問題にした「同一の心情」とは、ここから「自己嫌悪の心情」とも判る。この点からの整合性も取れているので、安心して答えよう。

問5

文法問題。傍線部の「まし」を見た瞬間、これが《推量》系の助動詞のうち《反実仮想》の助動詞「まし」であることは、すぐに掴めよう。すると、《反実仮想》の助動詞「まし」の「呼応」関係と言えば《仮定条件+まし》のことであり、『《未然形》ば、…まし』『…ましかば、…まし』『…ませば、…まし』『…せば、…まし』『…むに、…まし』といった形が代表的なものである。そこで選択肢を見ると、(エ)に「ましかば」があるので、何の躊躇もなく(エ)を答える。ちなみに、仮定条件との呼応を取らない場合、肯定文で《実現不可能な願望》を表す。また自分の動作について(多く疑問文型で)使われている「まし」は《躊躇》を表し、「しようか、どうしようか」と訳される。本文の「今宵はつれなくてやみなまし」の「まし」が《躊躇》の用法となっている。(「やみなまし」の「やみ」は「已む」の連用形、「終わらせる」の意。)

問6

ここでは「誰が誰と」という人物関係を訊いている。まず、傍線部の会話部分が「男」が「作者」に言っているものであるという点を押さえる。次に傍線部を含む一文、つまり会話引用符の中を解釈する。「入る(沈む)方向を慕っている人の御様子と全く

違つていらつしやいますね」と訳せる。「男」も「作者」も外にいて、まだどこにも出「入り」していないので、この本文の状況を離れたところで、この会話の真意を掴む必要があると考えられる。地の文では、この会話の部分の直前に『源氏物語』の世界が出てくる。そこで試しに、その世界を補足している「透垣」の注を見てみると、この会話に出てくる単語が見られる。「入る方・したふ」だ。そこで『源氏物語』を考える。結果を述べると、「入る方」とは「入る方見せぬ十六夜の月」のことで、『光源氏』を指している。よつて『源氏を慕う人』は「頭の中将」であることが掴める。これを当てはめると、「頭の中将の御様子と全く違つていらつしやいますね」と言っている。『源氏物語』の話では「頭の中将」は最初から透垣に隠れていた人で、そこに「源氏」が近寄つてきている。この場面では、作者の所に「男」が近寄つてきている。発言者が「男」である点からしても、「頭の中将」に見立てられているのは「作者」の方だと判る。従つて、これは「あなた（作者）の御様子は、中將の御様子と全く違つていらつしやいますね」と述べたものだと解釈されよう。従つて、正解は「作者と頭の中将」になる。また、「作者」を（『うたたね』の作者である）「阿仏尼」としても可。

問7

引用格の語句を追つて冒頭から読み流すと、「いかに思しまどふらんと」が出てくる。だが、この述部が「おしはかり聞ゆれど」と推測になっているので、除外する。次に進むと、「あはれ知る心のほど」があるが、これも「聞えんかたなく」と作者の行為についての表現なので、除外する。次に「聞え合せたくなど」が見つかる。述部が「あれば」という《記述（＝書いてある）》の説明になっている上に、「など」は《概略引用》を行うので、これが「手紙文」の終わりだと掴める。そこで、「聞え合せたく」から逆に遡つていくと、「いぶせさを、かれがれぞおどろかし給ひつる」とあるが、これは「久しぶりに気付かせた」の意味である。ここが手紙に入るとすると、手紙が「男からの」ものであることは設問からわかっているのだから、「女が男に何かを気付かせた」ことになる。しかし、冒頭から読んでくると、作者から男へはなんら積極的な働きかけをしていないことがわかる。したがつてこれは「（男から）手紙を送つてきた」ことを示すことになり、手紙の文面はその直後からの「つれなき世のあはれさもみづから聞え合せたく」だと掴める。なお、「など」は、地の文に相当するので、これを付けたら不可になる。手紙に「聞え合せたくなど」と書かれていたわけではないからだ。さらに、引用部を承ける助詞としては、「と・など」「とて」の三語に注目すべきことも確認しておこう。

問8 選択肢中の吟味すべき点を指摘する。

(ア)「情けない」案じては「世の常ならず……とすらんと、心細く思ひつづくる」に、「いっそ物思いのゝ思っている」は「ありしながら……過ぎまし、など思ひつづくる」に合致している。

(イ)「作者はゝわきまえつつ」は「あはれ知る心……聞えんかたなく」に相当する。「男の訪れのないゝ訴えている」は、「その程のまぎれ……日数経るいぶせさ」に相当する。

(ウ)「北の方を失った」でアウト。作者は「女」で、「北の方」は「奥さん」だ。また、本文でも、この部分に敬語表現を使っている。「北の方」を亡くしたのは「作者」以外の人物と容易に判るはず。

(エ)「可愛い我が子の将来を思う」が誤り。「子供」に相当するのは「かの小さき童」しか出てこないが、これは「男」と一緒に来ているので、「我が子」ではない。そうすると、この本文に「作者の子供」は全然登場していないことになるからだ。

(オ)「不安定なゝ関係」は「言ひしに違ふ……心地するは」「思ひ乱るるに……いかなるにか」(ア)「行く末」への心配などに合致している。「作者は源氏物語ゝ重ね合わせて」は「あはれ知る心」という引用や「透垣の……御住まひ思ひ出でらるる」「里わかぬ光」などに合致する。「その思い出に浸っている」は「あながち思ひ出でられて……多かり」によって、この夜のことが回想であると掴めば、合致していると判る。

(カ)「自分を源氏物語中のゝ印象づけようとしながら」が不適切。これは注をよく読めば判るが、この該当箇所に出てくるのは「光源氏」と「頭の中將」であって、ヒロインは出てこない。「末摘花」の屋敷で起こったことという設定でしかヒロイン(↓「源氏」を知っている人なら、末摘花をヒロインと言うのは、若干大袈裟だと思っだろうが)は、実質的に登場していない。また、本文でも「……御住まひ思ひ出でらるる」と、『源氏物語』の「一節」を思い出しているだけで、末摘花を自分に投影しているわけではないことを押さえよう。

(キ)「少なくとも問題文中に「もつと力強くゝ積極的な姿勢をうち出している」記述は一箇所もなく、恨み言と自己嫌悪と期待と陶酔に終止する文章である。

【配点の目安】 40点 問1 各1点×2＝2点 問2 3点 問3 (3)5点 (8)7点 問4 各2点×2＝4点 問5 4点 問6

各2点×2＝4点 問7 4点 問8 各1点×7＝7点

問3 (3)

〈ア到底イお伝え申し上げるようなウ方法もアなく〉…5点

※ア2点、イ2点、ウ1点

*アは、「なかなか…なくて」を「やすやすとは（とても・簡単には・思うようには・とてもじゃないが）…なく（て）」という旨訳出していれば可

*イは、「聞こえ」を謙譲語ととらえ、「お伝え申し上げるような・申し上げるような」と訳出していれば可

*ウは、「かた」を「手段（方法・すべ・手立て）も」という旨訳出していれば可

(8)

〈アどんな女の家もイ分け隔てしないウ光源氏にもエ匹敵するオに違いない力気持ち〉…7点

※ア2点、イ1点、ウ1点、エ1点、オ1点、カ1点

*アは、「里」を「女の家を・女の住む里を」という旨補足して訳出していれば可

*イは、「わかぬ」を「区別（分け隔て）しない（で照らす）」という旨訳出していれば可。また、「平等にする（平等に照らす）」という旨訳出しても可

*ウは、「光にも」を「光源氏にも・光にも・月光にも」などと訳出していれば可

*エは、「並び」を「匹敵する（肩を並べる）」「等しい（同じ程度）」などと訳出していれば可

*オは、「ぬべき」を「…に違いない」「きつと…だろう」など推量を強める働きを訳出していれば可

*カは、「心地」を「（素敵な）気持ち・気分・心地」という旨訳出していれば可



LT
直前難関国公立大国語
直前難関大国語 T
【1 回目】



会員番号	
------	--

氏 名	
-----	--